



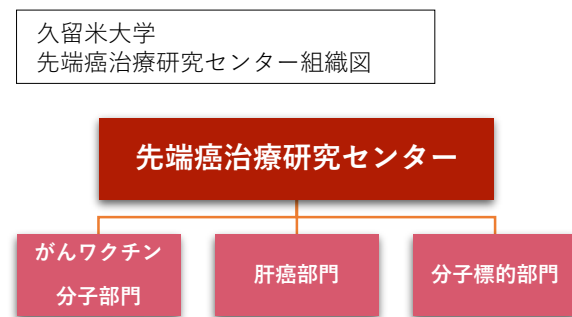
久留米大学  
先端癌治療研究センター 所長  
(がんワクチン分子部門所属)

**山田 亮**  
YAMADA Akira

経歴  
北里大学大学院 薬学研究科 (生物薬品製造学専攻)、  
九州大学大学院 医学研究科 (免疫学専攻) 卒業後、  
H15.12月より久留米大学先端癌治療研究センター教授、  
H28.4月より同研究センター所長

### がんは共存ではなく、 完治をめざす

**先端癌治療研究センターではどのような研究を行っていますか。**  
当センターでは新しい先端的な治療法の開発に特化した研究を行っています。  
私は、**がん免疫療法の基礎的研究**をしています。また、筑後地方は、全国と比べて肝臓がん患者さんが多く、当センターでは肝臓がんの治療研究も行っています。



久留米大学  
先端癌治療研究センター組織図  
センターは3つの部門に分かれており、いずれの部門も新しいがん治療法の開発を行っている。

**がんワクチン分子部門にご所属ですが、ワクチンといいますが、インフルエンザワクチンのように「免疫をつくり予防する」というイメージがあります。**  
感染症ワクチンは、言われるように「予防ワクチン」です。がんの予防ワクチンでは子宮頸がんワクチンやB型肝炎ワクチンがありますね。私たちが研究しているワクチンは、すでにがんにかかって

います。それは、がんに対する古い情報が刷り込まれているからだと思います。  
だからこそ、がん治療の専門家として、子どもたちに新しい情報を伝えることに意味があると思うのです。

**「がん患者さんは、普段どおりの生活を送りながらパートタイムで治療している」**  
早い段階から、がんについて知ることにより、偏見のない誰もが安心して生きていけるそんな時代を創ることができると思います。

**最後に、久留米市のお好きなところは。**  
私は東京生まれで、29歳の時に久留米に移ってきました。地方都市の良いところ取りをしたような街が久留米だと思えます。東京は、空を見上げるとビルに囲まれて空が四角にしか見えませんが、ここでは空が広く丸く見えます。

何より、果物の宝庫ですね。梨と柿が大好きな私にとっては極楽のようなところです。

し、健やかな社会生活を送れるよう日夜研究にとりくんでいます。

**先生は、高校生を対象にがん教育の事前講座も行われています。高校生にがん教育を行うこととされた理由は何ですか。また、どのようなお話しをされているのでしょうか。**  
我々にしかできない最先端の医療や予防・検診の重要性をお話ししようとして5年前に地域貢献の一環として始めました。

講座では、がんの治療は近年大きく変わったこととお話ししています。社会生活を送りながら治療を行っている患者さんが多くいらっしゃるんです。しかしながら、やはり「不治の病」であるというイメージが強い。通院治療が多くなっているのに、職場などで「治療に専念したほうがいいんじゃないか」と言われてしまう。言った人は気を使っているつもりでも、患者さんは「普通に仕事はできるのに」となってしまう。

私でさえ、がんだと言われたらやはり落ち込んでしまうと思うん

今までのがん治療に使われるワクチンは、どの患者さんにも使用可能な「共通ワクチン」でした。その中からそれぞれの患者さんに最適化した「テーラーメイドワクチン」でも、効果は2〜3割と限定された。そこで、それぞれの患者さん毎に異なる世界で「オンリーワンのワクチンを作り、処方すること」で劇的な効果を得ることができるとは思いません。

**すでに実際の治療にも使われているのでしょうか。**  
久留米大学で開発した「テーラーメイドがんペプチドワクチン」は大学での臨床研究を終え、私たちが設立したベンチャー企業によって、米国で臨床試験が行われており、実用化を目指しています。

**がんは「不治の病」というイメージがありますが、先生のご研究により「治る病気」へ変わりつつあるのでしょうか。**  
まずがん治療は日々進歩しています。乳がんにしても女性の9人に1人が罹りますが、10年たっても85%の人は元気に生活しています。前立腺がんは多くが治り、胃がんの原因の8割を占めるピロリ菌も駆除できるようになってい

**今やがんは「治る病気」へと移行しつつあります。しかし、これは早期発見・早期治療を行った場合の話で、未だ進行がんでは多くの患者さんが命を落としていることも現実です。**  
私たちが久留米大学では、一人でも多くの患者さんが、がんを克服

す。



高校で化学の教員をしていたお父様に連れられて、大学の研究室に行っていたことの影響もあったのか、小さいころから研究者になるのが夢だったそうです。ご自身の研究を、実際の医療に応用できるよう日々研究に励んでいらっしゃいます。

【インタビュー後記】  
研究者としてのお話だけでなく、教育者としてのお話も聞くことができました。  
私たちが持つ「がん」への不安、「がん患者さん」へのイメージは、現代の常識ではないということに気づかせていただいたと思います。

